



医療 と 哲学

第52回

医学の哲学④ 代替医療・統合医療を どう考えるか

旭川医科大学医学部医学科健康科学講座講師
杉岡 良彦

はじめに

「医学や健康の分野ほど、あやしげな信念や間違った信念、そして時に有害な信念がはびこっているところはない」(ギロピッチ, 1993年, 207頁), これはある心理学者の指摘です。また有名な物理学者は代替医療が疑似科学(pseudo-science)であると批判しています(パーク, 2001年)。

実際, 患者さんは(特にがんの場合など), 様々な代替医療を(必ずしも主治医に知らせずに)利用していることが多いといわれており, 先生方もそうしたケースに遭遇された経験があるかと思えます。今回は, 代替医療・統合医療の問題を考えたと思います。このことは同時にわれわれが実践する医学・医療を見直す医学哲学的作業でもあります^{注1)}。

注1) 今回の内容に関しては拙著(杉岡, 2014年)第11章「医学における疑似科学の問題」, 第12章「統合医療の問題点は何か」に詳細が記されています。

代替医療・統合医療とは

代替医療あるいは相補・代替医療(complementary and alternative medicine ; CAM)という言葉は, 多くの場合, 主流となっている従来の西洋医学とは別に利用されてきた歴史や起源を有する一連のヘルスケアシステムを意味します^{注2)}。代替医療の研究目的で1991年にNIH(米国国立衛生研究所)に開設された代替医療局は, 1998年に国立補完代替医療センター(National Center for Complementary and Alternative Medicine)となり, 2014年には国立補完統合衛生センター(National Center for Complementary and Integrative Health ; NCCIH)と名称が変わっています。この名称変更が示すように, 最近では単に通常医療の代わりとしてのalternativeではなく, それと一緒に用いられる場合が多いため, complementaryの用語がよく使われ, さらに通常医療と相補・代替医療とを合わせて統合医療 integrative medicine(または integrative health)という表現が好んで用いられています。NCCIHは相補・代替医療を天然物(natural products)と心身療